

I am Jazz! (ジャズ・スーパー列伝)

ジャズの発展に貢献し、その歴史に名を刻んだ名プレイヤーたち。その人生は、楽器が異なる如く千差万別。このコーナーでは、そんな個性的なジャズマンたちの功績を称え、生き様を紹介することで、より多くの人々にジャズの素晴らしさを伝えていきたい。

Vol.6

Nat "King" Cole【ナット・キング・コール】

～ジャズ史に燦然と輝く Mr. エンタイナー～



Profile

Herman Leonard / Redferns Music Picture Library

1919年3月17日、米アラバマ州モンゴメリーで牧師の次男として生まれる。本名はナサニエル・アダムズ・コールズ。「キング」は愛称。母からピアノを学び、4歳のときにタレント・コンテストで優勝。この頃に一家でシカゴに移住。12歳から父の教会でピアノやオルガンを弾き、合唱団で歌い始める。高校時代に自身のバンド「ロイヤル・デュークス」を結成し、36年に兄のエディ（b）をリーダーとするバンド「コールズ・ソリッド・シンガーズ」にピアニストとして加入し、初レコーディングを行う。37年にロスに移り、39年にオスカー・ムーア（b）とウェスリー・プリンス（ds）とキング・コール・トリオを結成し、ピアニスト & シンガーとして活動を開始。同年、ライオネル・ハンブトン楽団とRCAでレコーディングを行う。その後、マイナー・レーベルやデッカでの録音を経て、43年キャピトルと契約し、シンガーに転向。44年に自作の「ストレイトン・アップ・アンド・フライ・ライト」のヒットで一躍スターダムにのし上がる。46年に「フォー・センチメンタル・リズンズ」が初のポピュラー・チャート1位となると、続いて「ネイチャー・ボーイ」（1947）、アカデミー主題歌賞を受賞した「モナ・リザ」（1950）、「トゥ・ヤング」（1951）、「プリテンド」（1952）など数多くのビッグ・ヒットを連発。50年に娘のナタリーが誕生。55年にレギュラー・コンボを解散。音楽以外にも、56年には黒人として初の全国ネットワーク（NBC）で自身のショー『ナット・キング・コール・ショー』を持ち、60年に映画『セントルイス・ブルース』に出演するなど、ショー・ビジネス界でも大成功を収める。61年に初来日を果たし、63年にも来日公演を行った。1965年2月15日肺がんのため、カリフォルニア州サンタモニカで死去。享年45歳。

ナット・キング・コールの原点～トリオ時代の傑作集！



In The Beginning
Nat "King" Cole
 (ユニバーサル: UCCC-9084)

Nat "King" Cole (p, vo),
 Oscar Moore (g, vo),
 Wesley Prince (b, vo)

1. Honeysuckle Rose 2. I Like To Riff 3. Sweet Lorraine 4. Call The Police
5. That Ain't Right 6. This Side Up 7. Gone With The Draft 8. Babs
9. This Will Make You Laugh 10. Are You Fer It? 11. Early Morning Blues
12. Scotchin' With The Soda

ジャズ・フィーリング溢れるナットの代表作！



After Midnight
Nat "King" Cole
 (東芝 EMI: TOCJ-6804)

Nat "King" Cole (vo, p), John Collins (g), Harry
 "Sweets" Edison (tp), Willie Smith (as), Juan
 Tizol (vtb), ウィリー・スミス (as), スタッフ・スミス (vln) といった豪華なゲストを迎え、一流のヴォーカリスト & 一流のピアニストとしての才能を惜みなく披露してくれる。ピアノ・トリオ時代からのレパートリーに「スイート・ロレイン」やナットの代表曲のひとつでもあ

1. Just You, Just Me 2. Sweet Lorraine 3. Sometimes I'm Happy 4. Caravan
5. It's Only A Paper Moon 6. You're Looking At Me 7. The Lonesome One
8. Don't Let It Go To Your Head 9. I Know That You Know 10. Blame It On My Youth
11. When I Grow Too Old To Dream 12. (Get Your Kicks On) Route 66

ナット・キング・コール唯一のライブ・アルバム



At The Sands +3
Nat "King" Cole
 (東芝 EMI: TOCJ-9495)

Nat "King" Cole (vo, p), John Collins (g),
 Charlie Harris (b), Lee Young (ds),
 Dave Cavanaugh, Nelson Riddle,
 Pete Rugolo (arranger)

1. Ballerina 2. Funny 3. Continental 4. I Wish You Love 5. You Leave Me Breathless
6. Thou Swell 7. My Kinda Love 8. Surrey With The Fringe On Top 9. Where or When 10. Miss Otis Regrets 11. Joe Turner Blues
12. Mr. Cole Won't Rock & Roll 13. In A Mellow Tone 14. Watcha' Gonna Do

ナット・キング・コールと日本

1961年と63年に来日公演を行っているナット・キング・コール。初来日の時には、プロ野球やリトル・リーグを観戦したそうで、芸者に挟まれ微笑む写真なども残されている。大物ジャズ・ミュージシャンの来日が続いた60年代当時の日本のVIP層の大歓迎振りには、どのミュージシャンも感激したものとされるが、ナットもそんな親ムエージを抱いた一人であらう。そして、そんなナットが日本語で歌った曲も存在する。「ラヴ」と「枯葉」だが、共に二度目の来日後の1964年にレコーディングされ、「ラヴ」の訳詞は、60年代に流行った多くのアメリカン・ポップスの日本語訳を手掛けた訳詞家、連(さざなみ)健児。「枯葉」の訳詞は、「Shibazaki」とあるので、恐らく「ダイアナ」の日本語訳など、訳詞家として活躍していたホセ柴崎によるものと思われる。ナット自身も日本語の歌詞を理解しながらもローマ字表記の歌詞を追って歌ったと想像されるが、日本語の訳詞が実によくはまっています、ナットの発音もばっちり。どちらもアルバム『ザ・ワールド・オブ・ナット・キング・コール』(東芝 EMI: TOCP-67589)に収録されているので、是非聴いてみて欲しい。

1939年にオスカー・ムーア (g, vo) とウェズリー・プリンス (b, vo) と結成した「キング・コール・トリオ」によるデッカ録音 (40~41年) 16曲を収録したアルバム。当時は8枚のSP盤としてリリースされたもので、ファッツ・ウォーラー作の名曲「ハニー・サックル・ローズ」をはじめ、記念すべき初レコーディングとなったナットの十八番「スイート・ロレイン」に、若きナットオリジナルも8曲収録。ナットのソロ・ヴォーカルや何とも楽しげなトリオ・コーラスに、オスカー・ムーアの小さなギターも心地良く、あのオスカー・ピーターソン・トリオにも影響を与えたピアニスト&シンガー、ナット・キング・コールの原点がこのにある。

数あるナット・キング・コールの作品群の中でもスイング感&ジャイヴ感において最高値を叩き出している名盤。録音は1956年。自身のレギュラー・カルテットにハリー・"スウィーツ"・エディソン (tp)、ファン・テイズル (vtb)、ウィリー・スミス (as)、スタッフ・スミス (vln) といった豪華なゲストを迎え、一流のヴォーカリスト & 一流のピアニストとしての才能を惜みなく披露してくれる。ピアノ・トリオ時代からのレパートリーに「スイート・ロレイン」やナットの代表曲のひとつでもあ

1960年1月14日、アメリカ・ネバダ州ラスヴェガスのホテル「サズ」で行われたライブの様相を収録。オープニングの「パレリーナ」から、アントニオ・モレリ指揮のオーケストラに乗ってダイナミックにスイングするナットの臨場感溢れる歌声が堪らない。この時期には貴重なナットがピアノを披露する「ホエア・オア・ホエン」とポーナス・トラックの「イン・ア・メロー・トーン」「ワッチャー・ゴナ・ドウ」も味わい深いのが、最高の盛り上がりをも魅せる「ジョー・ターナーのブルース」に、見事なアレンジに加えユーモア&ウィットに富んだ「Mr. コール・ウオント・ロック&ロール」は格別！
 ザッツ・エンタテイメント！！

魅惑の歌声の秘密

あの独特の渋くれた声を出すためでもあったのだが、ヘビー・スモーカーとしても有名だったナット。あの紳士的でゴーヤスなイメージの裏でそのような努力・こだわりをみせていたが、結果的にその喫煙が寿命を縮めてしまったのかもしれない…。葬儀にはフランク・シナトラ、ロバート・ケネディ等も参列し、「スターダスト」が流されたそう。

娘ナタリーとのデュオ「アンフォゲッタブル」

娘ナタリーが亡父ナットとデュエットした「アンフォゲッタブル」は、現代のエレクトリック技術を駆使し、嘗てのナットのレコード(1961年に再録音したヴァージョンらしい)から歌声だけを取り出して新たに伴奏をつけ、それにナタリーがデュエットするという画期的なレコーディングにより1991年に実現。この感動のデュエットで、第34回グラミー賞のレコード・オブ・ザ・イヤー(最優秀シングル)、最優秀アルバムなど主要7部門を独占した。その授賞式の舞台上、スクリーンに映し出されたナットとナタリーが、時空を超えた「アンフォゲッタブル」のデュエットを披露。そして、忘れられない(アンフォゲッタブルな)夜になった。素晴らしい遺産を残してくれた父に感謝したい」と語ったナタリーの姿に世界中の人々が感動した。